



夏目漱石 人生波乱万丈

庚申の日の申の刻生まれは大泥棒になるという言葉伝えを回避すべく「金之助」と名付けられ、年老いてから出来た子ゆえ当時の世間に恥じて養子に出され、養子先では親の人形の如く扱われ、養父母離婚で親元に戻された。しかし彼は強かった。英語を学んで国際的に日本の役に立つ人間になろう。だがガリ勉を嫌ってスポーツに明け暮れ、病気になって試験が受けられず自ら落第し、自分みたいな変人は勤め人に向かないので建築家になろうかと考えた。なのに卒業して高校英語教師になり、松山に赴任したがイヤになって熊本へ転勤。結婚。でも教師を辞めたい。外務の翻訳官はどうか。本当は文学者になりたい。この間俳句・論文等を発表。結局名声を得て給費ロンドン留学。貧乏生活で神経が参る。帰国して東大講師。でも英文学者はずまらない。そこへ丁度発表した『吾輩は猫である』が好評を得て教師と作家の二足草鞋。だが小説を発表して人気を博す度に批評家がケチを付ける。元来癩癩持ちだから胃に悪い。でも小説を書くのは楽しい。筆一本で生きてみたいが子沢山だし生活費の心配がある。そこへ朝日新聞から話があったので、生活保障条件をきっちり盛り込んだ契約をして専業作家になる。胃潰瘍に苦しみながら日本の未来へ向けた提言を残す。世間の荒波を泳ぎ切り人間として自己の人生を高めて全うした。